

大阪府埋蔵文化財調査報告2008-5

# 銭塚古墳

-大阪府立堺支援学校福祉整備事業に伴う発掘調査-

大阪府教育委員会





錢塚古墳埴輪列出土

# 錢塚古墳

-大阪府立堺支援学校福祉整備事業に伴う発掘調査-

大 阪 府 教 育 委 員 会

## 序 文

錢塚古墳は、百舌鳥古墳群のほぼ中央部に位置し、北に仁徳陵古墳（大山古墳）、西に履中陵古墳（ミサンザイ古墳）、東に御廟山古墳などの巨大な前方後円墳に囲まれています。

明治時代の地図によれば、錢塚古墳は前方後円墳として描かれています。さらにその頃の地籍図を見ると、濠のあったこともうかがえます。しかし、大正年間の絵図などでは、前方部や濠は見られず、現在と同じような形状になっていました。

今回の発掘調査によって、錢塚古墳は全長約72m、後円部の直径が約54mの前方後円墳であることが明らかとなりました。また、後円部の墳丘上には円筒埴輪列が存在することも確認できました。

現在「百舌鳥古墳群」は、藤井寺市、羽曳野市に所在する「古市古墳群」と共に、「世界文化遺産」の登録をめざしています。錢塚古墳の発掘調査成果も、その一助となれば幸いと考えています。

最後に、発掘調査に際して、多大なご協力、ご支援を賜りました大阪府立堺支援学校、堺市の皆さまには記して感謝いたします。

平成21年3月

大阪府教育委員会事務局  
文化財保護課長 富尾 昌秀

## 例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会文化財保護課が同教育委員会施設課の依頼を受けて実施した堺市堺区東上野芝町（府立堺支援学校内）所在の錢塚古墳の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は、文化財保護課調査第二グループ主査橋本高明が担当し、平成19年8月に実施した。遺物整理は調査管理グループ主査宮野淳一、同三宅正浩、副主査藤田道子を担当とし、平成20年度に実施した。
3. 本調査の測査番号は、07024である。
4. 本調査の基準点、水準点測量は、株式会社南紀航測センターに、出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 調査で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。
6. 本書の執筆、編集は橋本が実施した。
7. 発掘調査、遺物整理及び本書の作成に要した経費は、すべて施設課が負担した。
8. 本書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、620円である。

## 目 次

巻頭写真図版		
はしがき		
例言		
目次		
I. 調査に至る経緯	1	
1. 調査の経緯	1	
2. 調査の方法	2	
II. 調査成果	3	
1. 1トレンチ	3	
2. 2トレンチ	3	
3. 3トレンチ	3	
4. 4トレンチ	9	
5. 5トレンチ	9	
6. 6トレンチ	14	
7. 7トレンチ	14	
8. 8トレンチ	21	
9. 9トレンチ	22	
10. 10トレンチ	22	
11. 出土遺物	26	
III.まとめ	29	
報告書抄録	30	
第1図 調査地位置図		1
第2図 假製図		2
第3図 トレンチ配置図		4
第4図 1トレンチ断面図		5~6
第5図 2トレンチ断面図		7~8
第6図 3トレンチ断面図		7~8
第7図 4トレンチ平面図		10
第8図 4トレンチ断面図		11~12
第9図 5トレンチ平面図		13
第10図 5トレンチ断面図1		15~16
第11図 5トレンチ断面図2		15~16
第12図 6トレンチ平面図		17~18
第13図 6トレンチ断面図1		17~18
第14図 6トレンチ断面図2		17~18
第15図 7トレンチ平面図		19~20
第16図 7トレンチ断面図		19~20
第17図 8トレンチ埴輪列検出状況図		21
第18図 8トレンチ断面図		23~24
第19図 9トレンチ断面図		23~24
第20図 10トレンチ断面図		25
第21図 墓輪実測図1		27
第22図 墓輪実測図2		28
写真図版1 トレンチ全景		
写真図版2 トレンチ全景		
写真図版3 トレンチ全景		
写真図版4 トレンチ断面		
写真図版5 トレンチ断面		
写真図版6 出土遺物1		
写真図版7 出土遺物2		
写真図版8 出土遺物3		
写真図版9 出土遺物4		

# I. 調査に至る経過

## 1. 調査の経緯（第1図）

大阪府教育委員会施設課は、府立堺支援学校の福祉整備事業を計画した。校内には錢塚古墳が存在し、その取扱いについて同文化財保護課と協議がなされた。協議の結果、整備事業は、錢塚古墳の元來の形状の復元も含めることとなり、事業に先駆けて古墳の実態を把握するべく発掘調査を行うこととした。調査は、現存する後円部の残存状況、濠を含めた古墳の形狀を確認すること



第1図 調査地位置図

とを目的として行うことになった。

## 2. 調査の方法（第2図）

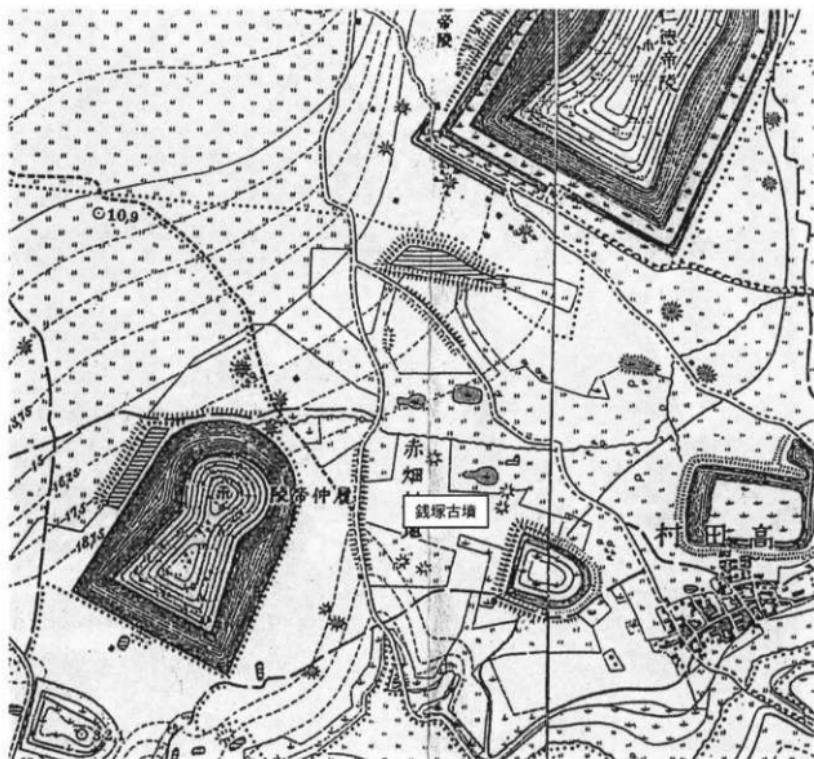
錢塚古墳は明治18年に旧陸軍が作成した仮製図によれば、東西方向に主軸をもつ前方後円墳として描かれている。また、同時期の地籍図には墳丘の周囲に濠も描かれている。

調査は、仮製図、地籍図<sup>⑩)</sup>と昭和56・57年度に大阪府教育委員会が実施した発掘調査成果をもとにして、全長約70mの前方後円墳を図上で復元し、10か所のトレンチを後円部、くびれ部、前方部等に設定した。

各トレンチにおいては、現在の盛土、表土、旧耕作土等を重機で除去した後、人力によって地山まで掘削し、平面図、断面図の作成、写真撮影をおこなった。

また、調査と並行して現況の墳丘の測量を実施し、1/100縮尺の測量図を作成した。

注1 堆市白神典之氏ご教示。



第2図 仮製図

## II. 調査の成果

先にも述べたように、錢塚古墳が前方後円墳であることを想定して、10ヶ所のトレンチを設定した。

後円部及びその周辺については、現況の墳丘の残存状況及び墳丘の構築過程、濠の規模、有無を確認することを目的に、比較的狭小なトレンチで断面観察を中心に調査を実施した。

後円部から前方部への「くびれ部」および「前方部」コーナーについては、遺構検出するため面的な調査を実施した。

以下、各トレンチの調査成果について記述する。

### 1. 1 トレンチ（第4図：写真図版1・4）

想定した主軸方向に合わせて後円部の西側に、墳丘斜面及び墳丘裾からさらに西に向かってグランド部分に設定したトレンチである。トレンチの全長は約15m、幅1~1.5mである。

墳丘部分の堆積状況は、表土層の下に⑥層、⑦層がある。ともに⑧、⑨、⑩層と土質、色調とともに極めて似ているが少量の埴輪を含むことから墳丘盛土の二次堆積層と考えられる。⑧層、⑨層、⑩層には埴輪等遺物は認められない。さらに⑥・⑦層に比べて、より固くしまっていることから墳丘盛土と考えられる。墳丘内の地山の最高所は、T.P.+19.7mである。

墳丘の傾斜は、トレンチ内の最高所であるT.P.+21.5m付近から東に向かって緩やかに傾斜するが、T.P.+20.8m付近でT.P.+19.7mまでは崖状に降下した後、平坦になる。この間約3mは墳丘がえぐられたような状況である。その部分に⑦層が堆積したことになる。

現況の墳丘裾より約3.5m西の地点（現況の墳丘の内側）でT.P.+19.0mとなり、東にむかって平坦になる。この付近が本來の墳丘裾に近いと考えられる。本来の墳丘裾から東には所々グランド造成土の直下に耕作土が認められる。学校のグランドが造成されるまでは、本来の墳丘裾がほぼ露出し、墳丘の東側には耕作地が広がっていたと思われる。耕作土内には埴輪が認められないことから、耕作土は他の場所から客土された可能性が高い。

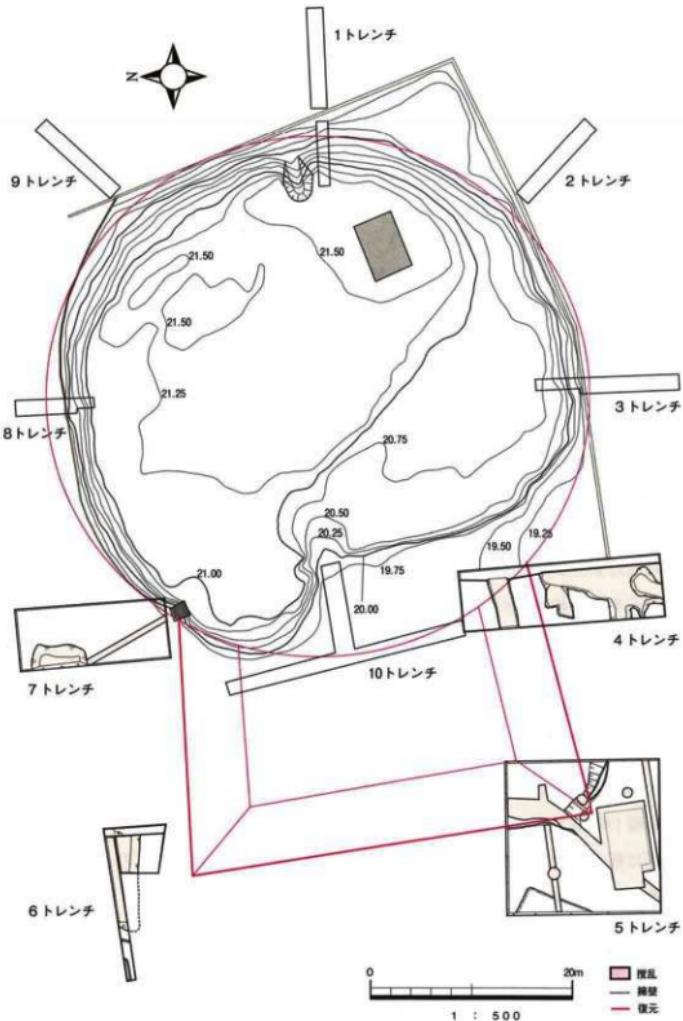
墳丘裾から東側の層位はグランド盛土、耕作土の下層に⑪層、⑫層、⑬層、⑭層の暗灰色系の粘土層が⑮層（地山）直上まで薄く堆積している。⑪~⑭層は少量の埴輪を含んでいる。⑮層（地山）の上面は細かい凹凸が激しくみられ、「足跡」あるいは「踏み込み」のように思われる。水分を多く含む軟弱な状況であったことがうかがえる。

出土遺物は、墳丘上の表土、グランド盛土、⑥・⑦・⑪~⑭層より埴輪が出土した。特にグランド盛土から多く出土した。

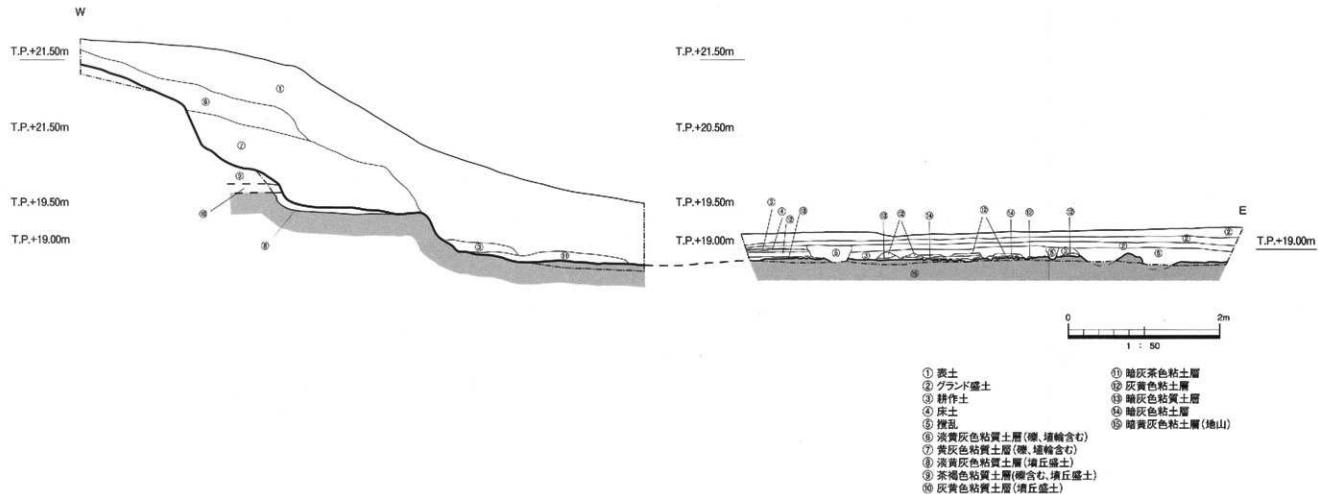
### 2. 2 トレンチ（第5図：写真図版1・4）

後円部の南東側に、墳丘裾から南東に向かって設定したトレンチである。トレンチの全長は約10m、幅1.5mである。

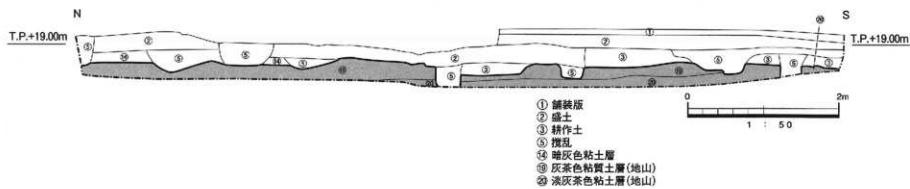
盛土の直下に部分的ではあるが、耕作土が残る。耕作土の下層は、北西側では⑯層が部分的に



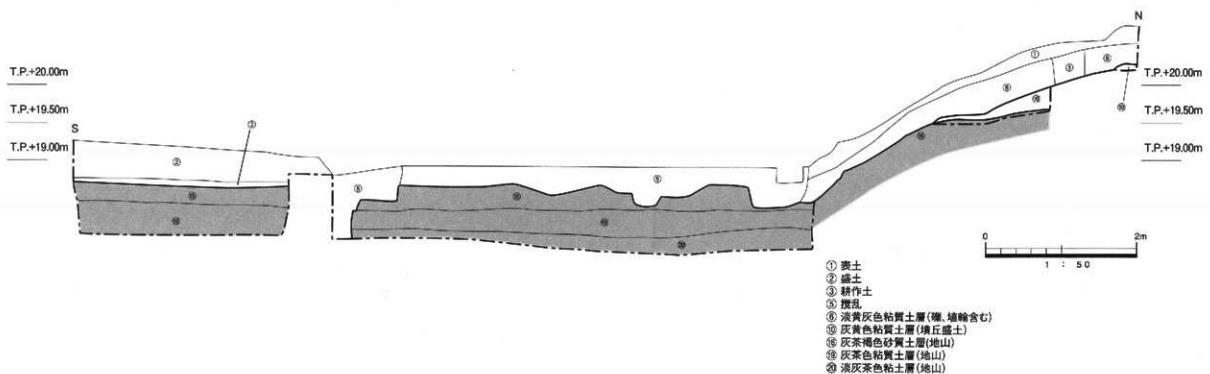
第3図 トレンチ配置図



第4図 1トレンチ断面図



第5図 2 トレンチ断面図



第6図 3 トレンチ断面図

⑯層（地山）の直上に堆積しているが、南東側では耕作土の直下は⑯層（地山）である。⑯層（地山）上面の高さは、T.P.+18.7 m前後で、トレンチ全面にわたって平坦である。

出土遺物は、⑯層より少量の埴輪が出土した。

### 3. 3 トレンチ（第6図：写真図版1・4）

想定した主軸の直交方向に合わせて後円部の南側に、墳丘斜面及び墳丘裾からさらに南に向かって設定したトレンチである。トレンチの全長は約14m、幅1～1.5mである。

墳丘部分の堆積状況は、表土層の下に⑥層がある。1トレンチと同様、墳丘盛土の二次堆積層と考えられる。⑯層も1トレンチと同様、埴輪等遺物は認められないことから墳丘盛土と考えられる。墳丘内の地山の最高所は、T.P.+19.7mであり、1トレンチと同じである。墳丘裾については、排水溝によって搅乱を受けているものの現況の墳丘裾と本来墳丘裾の位置はあまり変わらないと思われる。

墳丘裾から南側の層位は、トレンチ北側の校内道路部分では道路盛土の直下に⑯層（地山）が見られ、校内道路建設時に地山まで削りこまれたと考えられる。トレンチの南側では盛土の直下に薄く耕作土が残り、その直下が⑯層（地山）である。⑯層地山上面の高さは、T.P.+18.7mである。

出土遺物は、墳丘上の表土、グランド盛土、⑥層より少量の埴輪が出土した。

### 4. 4 トレンチ（第7・8図：写真図版2・4）

想定した南側の「くびれ部」に、設定したトレンチである。トレンチは南北10m、東西3mである。トレンチの約半分は不定形な土坑や溝によって大きく搅乱を受けていた状況であった。

搅乱土を除去すると、⑯層（地山）、⑯層（地山）ないしは⑯層（地山）が露出し、ほぼ全面にわたって地山層まで削られていると考えられる。ただし、トレンチの北端付近や北端から南へ5.8mの地点では、比較的高い地山が高く残っていてT.P.+19.2mを測る。さらに、トレンチの南端に搅乱土坑の底に薄く残存する耕作土層の高さは、T.P.+18.4mである。これらを1トレンチ、3トレンチの状況と照らし合わせると、地山がT.P.+19.0mより高い部分は墳丘内にあたる可能性があるし、耕作土の残る部分についても他のトレンチの耕作土の高さとさほどかわらない。

出土遺物は、搅乱土坑の埋土より埴輪が出土した。

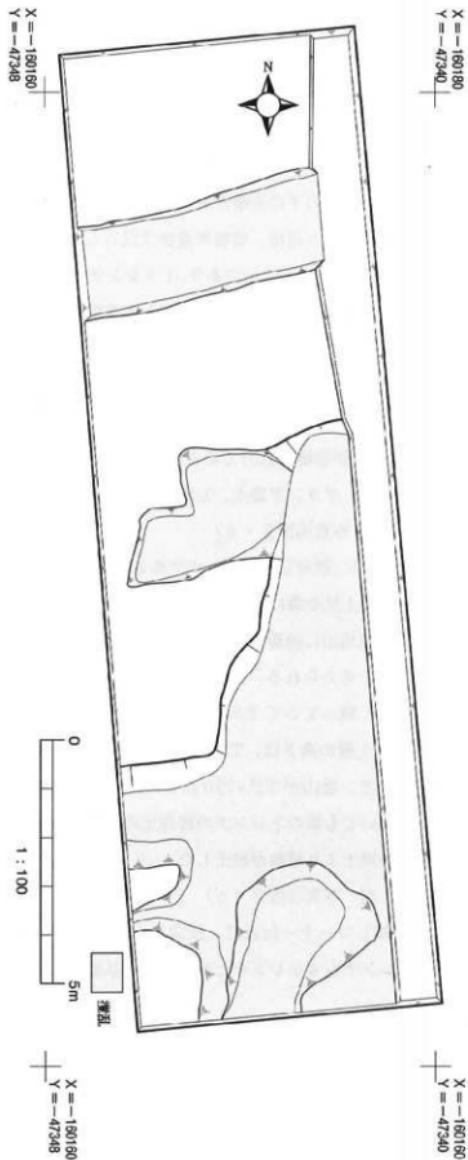
### 5. 5 トレンチ（第9～11図：写真図版2・4）

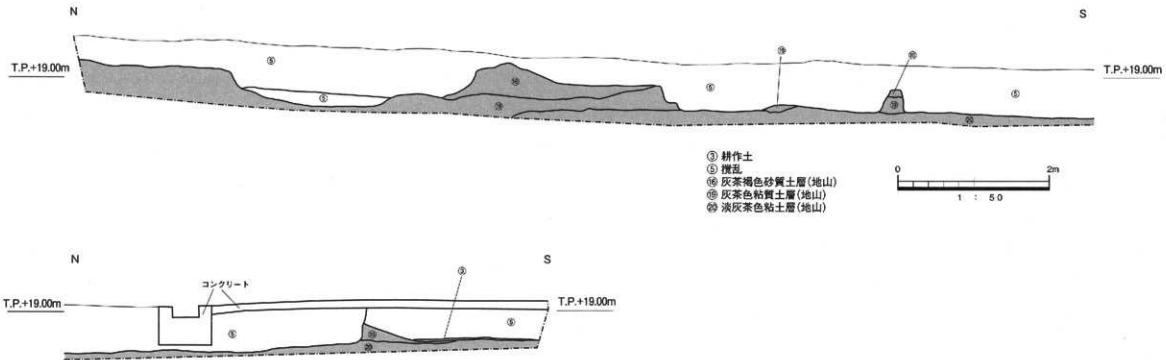
想定した南側の「前方部」コーナー付近に、設定したトレンチである。トレンチは一辺15mの正方形である。このトレンチも4トレンチと同様、建物基礎、配管水路等によっての大きく搅乱を受けている。

トレンチの北東部分に南北10m、東西6.5mにわたって高台部分を確認した。高台部分の地山の高さは、T.P.+18.8m前後でその周囲よりも0.2～0.3m高くなっている。高台部分の地山上面は、やや凸凹している耕地化する以前に削られた可能性がある。

トレンチ北側の東西方向の断面を見ると、盛土直下に0.2～0.3mの厚みで耕作土があり、その直下は⑯層（地山）である。そして先にも述べたようにトレンチ東端から6.5mの所で約0.3

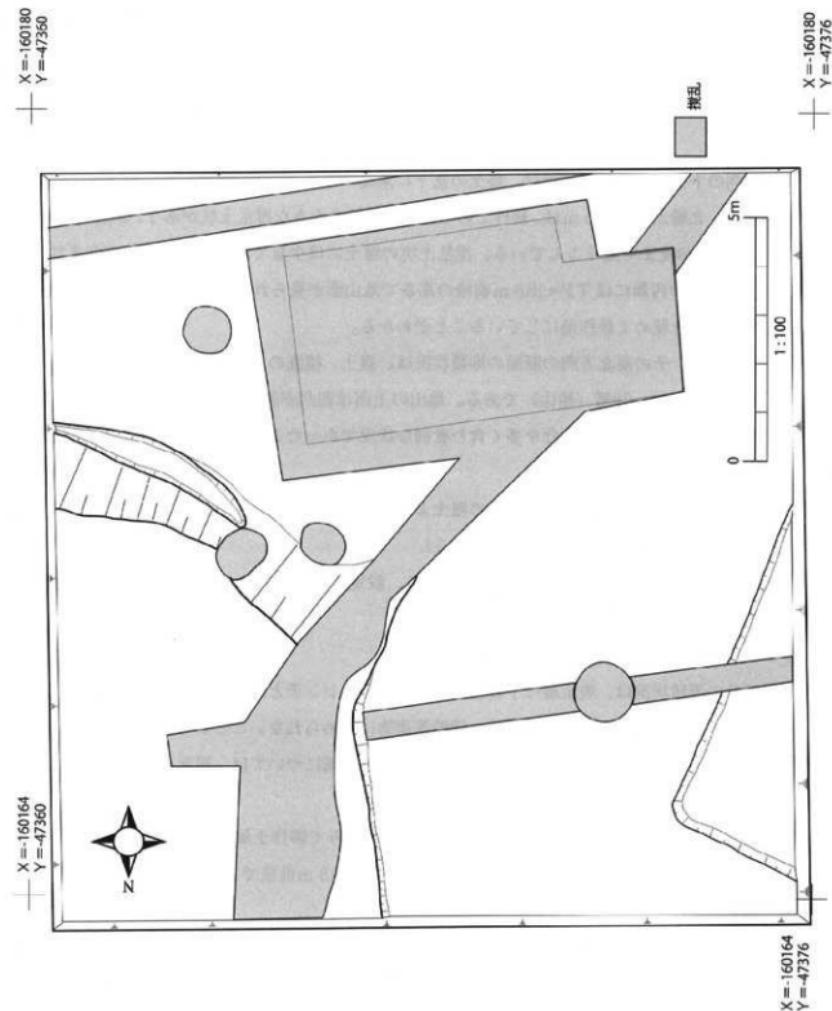
第7図 4トレンチ平面図





第8図 4 トレンチ断面図

第9図 5トレンチ平面図



m程度の段差がある。この段差は、南北方向に直線的に約5m確認した。トレーニング東側の南北方向の断面においてもほぼ同じような堆積状況である。東西方向の段差は、比較的傾斜は緩い。

出土遺物は、盛土より少量の埴輪が出土した。

#### 6 トレーニング (第12~14図:写真図版2・5)

想定した北側の「前方部」コーナー付近よりやや北に、設定したトレーニングである。トレーニングは東西方向に長さ15m、幅1mの長方形を当初設定したが、搅乱が激しく東側に拡張した。このトレーニングも4・5トレーニングと同様、ため池状の落ち込み、配管等によっての大きく搅乱を受けている。

東西方向のトレーニングの堆積状況は、盛土の直下に東端から約11mは耕作土層が0.2~0.3mの厚みである。北端から約8.5mは、耕作土の下はため池状の大きな搅乱土坑があり、⑩層(地山)をT.P.+18.3m前後まで掘りこんでいる。搅乱土坑の埋土には少量ではあるが、埴輪が含まれている。搅乱土坑の西側にはT.P.+18.8m前後の高さで地表面が見られる。したがって、浅いため池状の搅乱土坑を埋めて耕作地にしていることがわかる。

拡張したトレーニングの南北方向の断面の堆積状況は、盛土、搅乱の下に部分的に耕作土が認められる。耕作土の下は、⑩層(地山)である。地山の上面は凹凸が激しく、「足跡」あるいは「踏み込み」のように思われる。水分を多く含む軟弱な状況であったことがうかがえる。地表面の高さはT.P.+18.9~18.6mである。

出土遺物は、浅いため池状の搅乱土坑の埋土より埴輪が出土した。

#### 7.7 トレーニング (第15・16図:写真図版2・5)

想定した北側の「くびれ部」付近よりやや北に、設定したトレーニングである。トレーニングは南北10m、東西4mの長方形である。

トレーニングの南東隅に後円部の墳丘裾を確認した。

墳丘部分の堆積状況は、表土層の下に⑥層がある。1トレーニングと同様、墳丘盛土の二次堆積層と考えられる。⑧層も1トレーニングと同様、埴輪等遺物は認められないことから墳丘盛土と考えられる。墳丘内の地山の最高所は、T.P.+19.5mである。墳丘裾については、現況の墳丘裾と本来の墳丘裾の位置はあまり変わらないと考えられる。

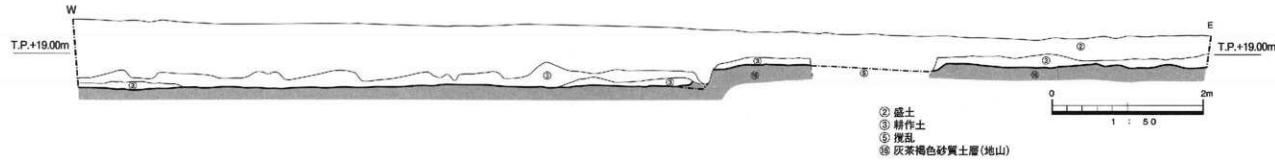
墳丘裾から北側の層位は、表土直下に0.2~0.3mの厚みで耕作土層が見られる。耕作土層の直下は、⑩層(地山)である。地山上面の高さは、T.P.+18.8m前後で、平坦である。

出土遺物は、墳丘上の表土、⑥層より少量の埴輪が出土した。

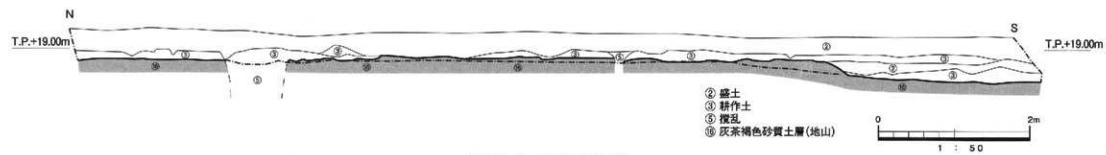
#### 8.8 トレーニング (第17・18図:写真図版3・5)

想定した主軸の直交方向に合わせて後円部の北側に、墳丘斜面及び墳丘裾からさらに北に向かって設定したトレーニングである。3トレーニングから後円部を挟んで反対側にあたる。トレーニングの全長は約8m、幅1~1.5mである。

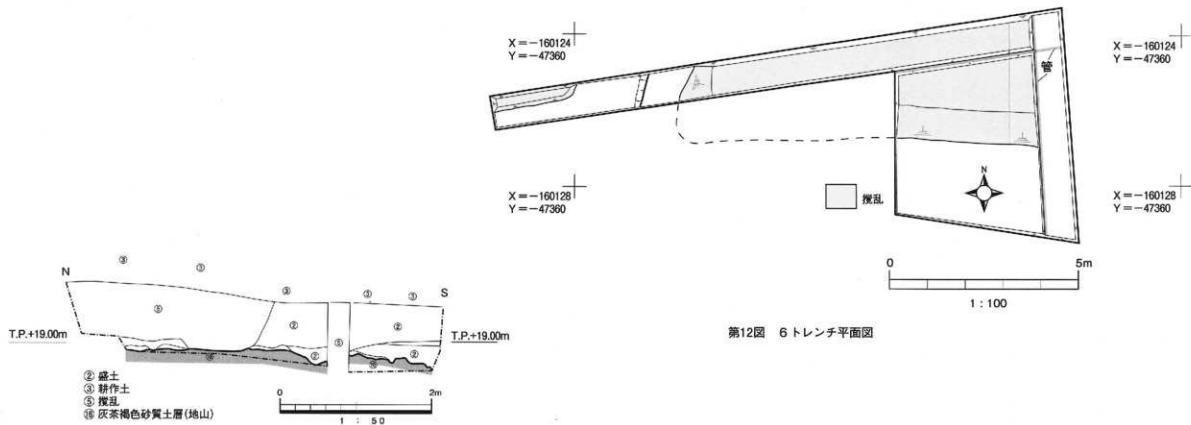
墳丘部分の堆積状況は、表土層の下に⑥層、⑦層がある。ともに少量の埴輪を含むことから墳



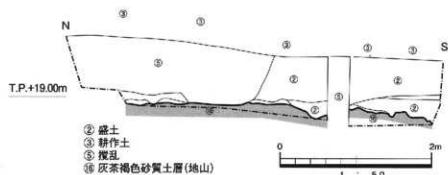
第10図 5 トレンチ断面図1



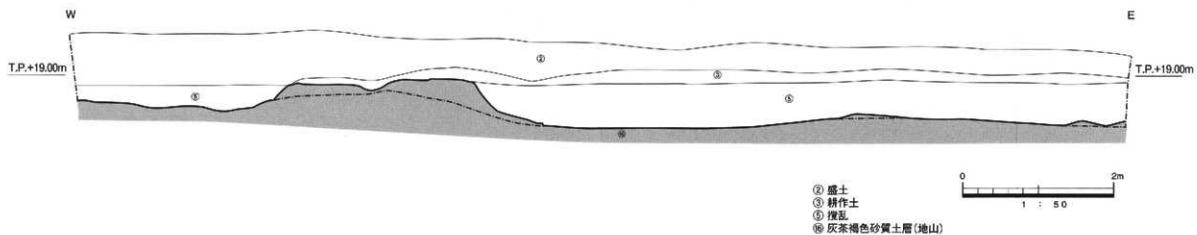
第11図 5 トレンチ断面図2



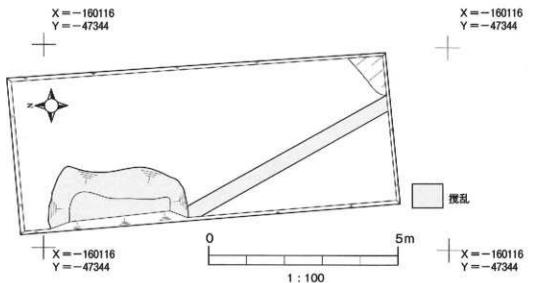
第12図 6トレンチ平面図



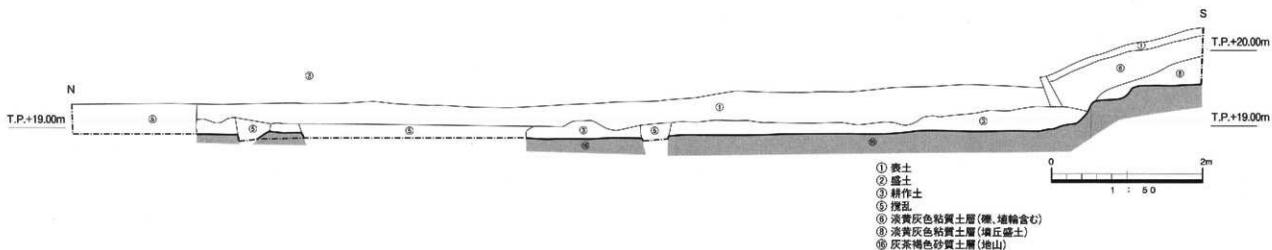
第13図 6トレンチ断面図1



第14図 6トレンチ断面図2



第15図 7トレンチ平面図



第16図 7トレンチ断面図

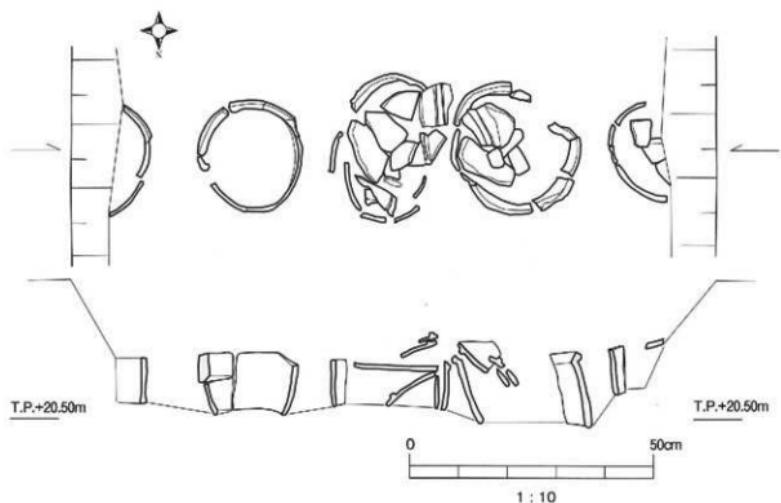
丘盛土の二次堆積層と考えられる。⑧層、⑨層、⑩層には埴輪等遺物は認められないことから墳丘盛土と考えられる。墳丘内の⑪層（地山）の最高所は、T.P.+19.5 mである。

墳丘の傾斜は、トレンチ内の最高所であり、円筒埴輪列を検出したT.P.+20.5 m付近は平坦面で、円筒埴輪列より約0.6 m北方のあたりから緩やかに下降する。墳丘裾は、現況の墳丘裾より0.5 m外（北側）で確認した。T.P.+18.8 mである。それより北は平坦面が続く。

墳丘裾から北側の層位は校内道路の下に0.2 m前後の厚みで耕作土が見られ、その下層は⑪層（地山）である。

円筒埴輪列は、調査で確認した本来の墳丘裾より約1.7 m上方で検出した。おそらく墳丘の一段目のテラスと考えられる。円筒埴輪は、幅約1 mのトレンチ内に5個体出土した。両側の2個体は半分はトレンチの外側であるから1 mに4個体の割合で並んでいくことになる。各円筒埴輪の底部径18 cm前後、口縁部まで復元できた円筒埴輪（1）の口縁部径は22.5 cmであるから、ほぼ口縁部が接するぐらいの間隔で並べられていたことがわかる。円筒埴輪列の掘方の有無は不明であるが、⑪層から掘りこんでいる。

現在の墳丘の最高所はT.P.+21.5 m、T.P.+21 m程度の高さでほぼ平坦面となっている。8トレンチで確認した一段目のテラスの上面の高さが、T.P.+20.5 mであり、テラス面の上面に被る土層は表土層及び墳丘の二次堆積層である。したがって、現存する墳丘はほぼ一段目までのとを考えられ、二段目より上方の墳丘は欠損していると思われる。



第17図 8トレンチ埴輪列検出状況図

出土遺物は、円筒埴輪列以外では墳丘上の表土、⑥、⑦層より少量の埴輪が出土した。

#### 9. 9 トレンチ（第19図：写真図版3・5）

後円部の北東側に、墳丘裾から北東に向かって設定したトレンチである。トレンチの全長は約10m、幅1.5mである。

盛土の直下に部分的ではあるが、耕作土が残る。耕作土の下層には、部分的にではあるがは⑧層が⑩層（地山）あるいは⑫層（地山）の上面に堆積している。北東側では耕作土の直下は⑯層（地山）である。⑯層（地山）の高さは、T.P.+19～18.7m前後で、北東側にやや地山の高い部分がある。

出土遺物は、グランド盛土、⑮層より少量の埴輪が出土した。

#### 10. 10 トレンチ（第20図：写真図版3・5）

後円部西端から前方部にかけて設定した「T」字状のトレンチである。南北方向は長さ10m、幅1m、東西方向は長さ11m、幅1.5mである。

南北方向のトレンチ南半分、東西方向のトレンチ南半分は全面擾乱を受けていた。以前にこの付近に建物が数棟あった影響と考えられる。

東西方向のトレンチの北側の断面を見ると、トレンチの東側において表土層の直下に③層がある。遺物は含まない。極めて緻密な粘土で、乾燥時には固くしまっている。④層も同様で③層よりやや白っぽく極めて緻密な粘土層である。③層、④層は他の9ヶ所のトレンチでは認められない。一応④層は、無遺物で、③層より広く分布することから地山と考えたが確認はなく、墳丘の中央付近にのみ存在する墳丘盛土一部の可能性もある。南北方向のトレンチの北側においても同じ状況で、表土、盛土の直下に④層が認められた。

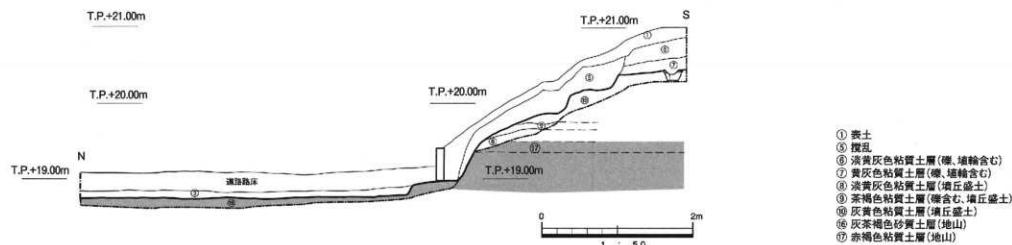
また、東西方向のトレンチの東方の延長上に数ヶ所のトレンチ（1×1m）を設定して、③、④層の状況の確認を試みたが、樹根が厳しく人力では到底掘削できないため、断念した。

遺物は、出土しなかった。

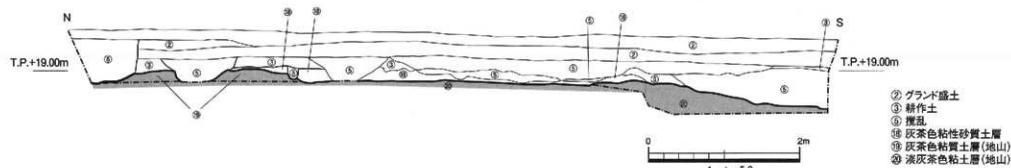
#### 11. 出土遺物（第21・22図：巻頭写真図版、写真図版表紙、写真図版6～9）

今回の調査で出土した遺物は、大半が円筒埴輪である。他に、少量須恵器、瓦器、近世陶磁器が出土した。出土した埴輪には、円筒埴輪、胡顔形埴輪、形象埴輪がある。

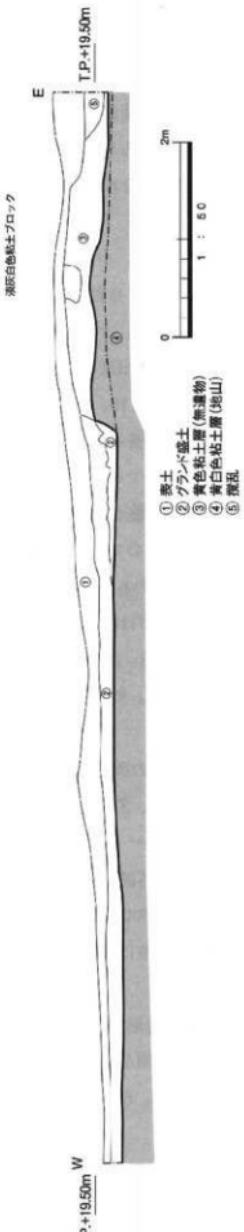
1～3は、8トレンチで検出した円筒埴輪列のものである。円筒埴輪列では、5個体の円筒埴輪を検出したが、両側の2個体はトレンチの外にかかるために現地に残り、3個体取り上げた。1は口縁部から底部まで残り、完形品に復元できた。底部径18cm、口縁部径22.5cm、器高41.8cmを計るもので、黒斑は見られない。透孔は円形で下から2段目、3段目に2方向場所をたがえて穿たれている。タガは3段あり、その形態は上端部を若干つまみ出すものである。口縁部はやや外反し、端部は平坦である。胴部外面の調整は、明瞭な静止痕を残すB種横ハケである。ハケ目の間隔は1cm当たり7～8本である。内面の調整は下方に少し指圧痕が見られる以外は、磨滅が激しく不明であるが、おそらく全面ナデと思われる。2は底部から1段目のタガより若干上部まで残るもので、底部径は17.8cm、残存高16.7cmを計る。黒斑は見られない。タガは断面



第18図 8 トレンチ断面図



第19図 9 トレンチ断面図



台形である。胴部外面の調整は縦ハケの後横ハケを施している。内面の調整は粗い指ナデ痕が縦方向に見られる。3は底部から2段目のタガより若干上部まで残るもので、底部径は18cm 残存高30cmを計る。黒斑は見られない。タガは断面台形であるが、1、2に比べて幅広く、突出度は低い。透孔は円形で下から3段目に1孔見られるが残存状況が懸く数は不明である。胴部外面の調整は最下段は縦ハケの後横ハケを施し、2段目、3段目は横ハケのみである。内面の調整は粗い指ナデ痕が縦方向に見られる。

4～20、50～56は円筒埴輪胴部片である。小片のため断面のみ記載した。4～14は外面の調整が横ハケで7、10は明瞭な静止痕を残すB種横ハケである。4は調整後、ヘラ先で円弧を描いている。内面の調整は粗い指ナデである。タガの形状は4～11は上端部を若干つまみ出すものである。12～14のタガは断面台形で突出度は低い。黒斑は見られない。焼成は13以外は良好で、須恵質に近いものもある。15～17、19、21は外面の調整が横ハケで、17は明瞭な静止痕を残すB種横ハケである。内面の調整は横ハケである。タガの形状は上端部を若干つまみ出すものが大半で、21のみ突出度の高い台形である。黒斑は見られない。焼成は良好で、須恵質に近いものもある。18、20、22は外面の調整が横ハケで、内面の調整は縦ハケである。タガの形状は18、20は上端部を若干つまみ出すもので、22は突出度の高い台形である。黒斑は見られない。焼成は良好で、20は須恵質に近いものもある。50～56は非常に焼成の悪い一群で色調は赤橙色である。内外面共に調整は不明、タガは幅広で突出度は低い。

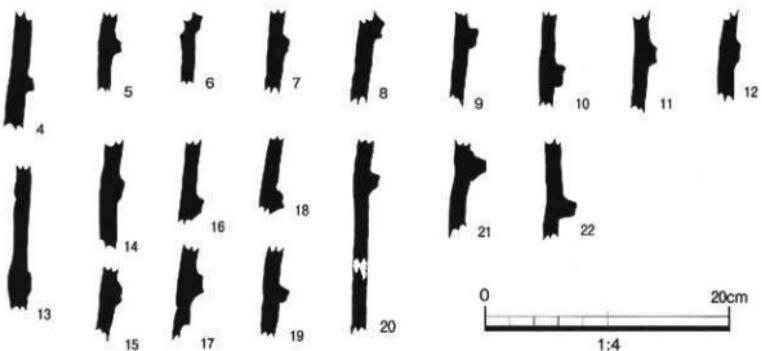
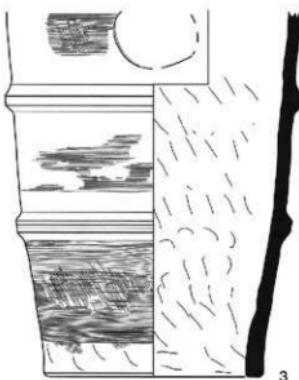
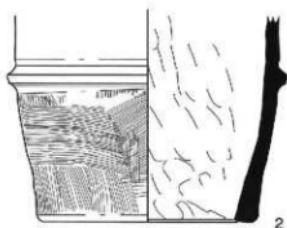
23～27は円筒埴輪の口縁部片である。23、24は端部の中央が少しくぼむ、25～27は端部を突出させている。27は外側に拡張している。外面の調整は横ハケである。23は静止痕を残すB種横ハケである。

28～38、57～60は底部片である。外面の調整は28、29、36、37は縦ハケを施す。他は磨滅が激しく不明である。内面の調整は28、29、37はナデ、36は縦ハケである。他は磨滅が激しく不明である。38、57～60は非常に焼成の悪い一群で、胴部片の50～56と同一個体かもしれない。

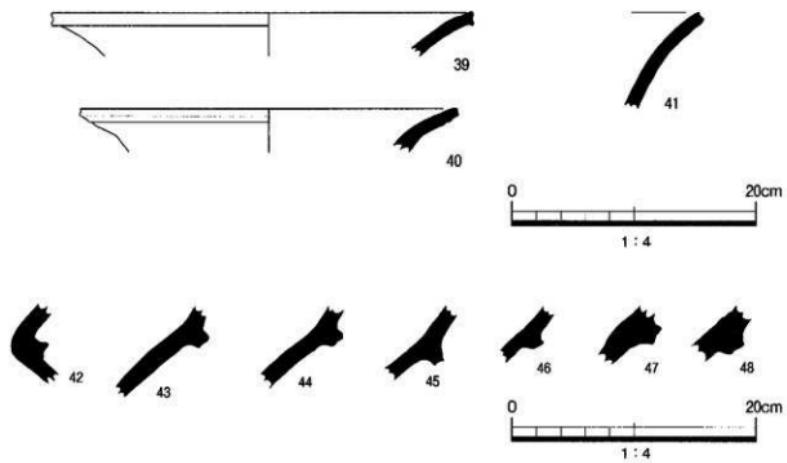
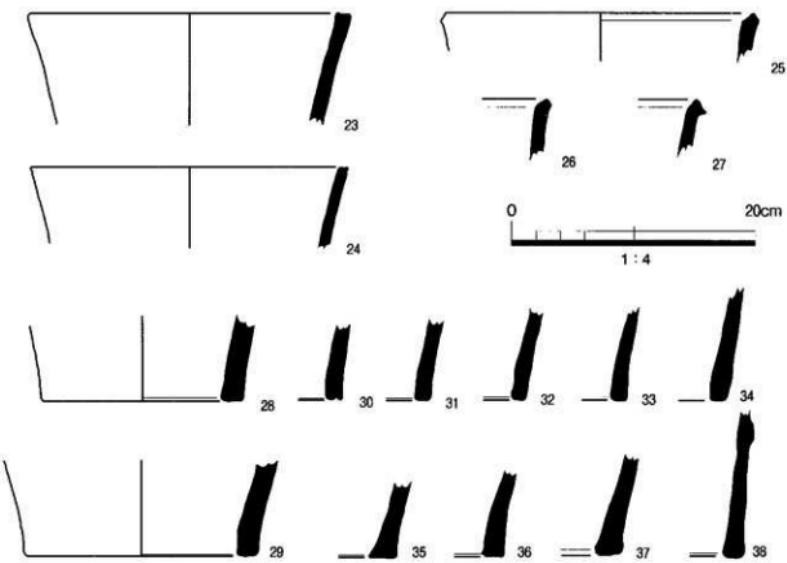
39～41は朝顔形埴輪の口縁部である。外面の調整は39、40は縦ハケを施す。41は斜め方向のハケの後縦ハケである。内面の調整はすべてナデである。

42～48は朝顔形埴輪である。外面の調整は40のタガより下部が横ハケ以外は、全て縦ハケを施す。内面の調整はすべてナデである。

61～70は形象埴輪である。61～64は蓋形埴輪である。両面に同様の先刻文様を施す。64は後円部上で表面探査したものであるが、大型品である。65～70については、形象埴輪と思われるが形状がわからない。66は馬形埴輪、68、69は蓋形埴輪の可能性はあるが不明である。



第21図 増輪実測図1



第22図 塙輪実測図2

### III. まとめ

錢塚古墳の墳形は、明治 18 年の仮製図では前方後円墳として図示されている。しかし、大正年間の絵図（『百舌鳥耳原三御陵 陪塚並陪塚ト認ムベキ民有地略図』大正四年写）では、円墳に描かれており、古墳の規模は「高九尺、周八拾七間」と注記され、大正 11 年発行の『大阪府全志』卷之五には「錢塚高さ壹間五分・周圍八拾七間七分」とある。仮に 1 尺を 0.3 m、1 間を 1.8 m として換算すると「高 27 m、周 156.6 m（直径 52.2 m）」、「高さ 2.7 m・周囲 162.7 m（直径 54.2 m）」となる。今回の作成した測量図では、古墳の最高所は T.P.+21.5m、後円部の直径は約 54 m、墳丘裾は T.P.+19 m 前後であるから墳丘の高さは約 2.5 m である。大正年間の記録と現況はほとんど差がなく、明治 18 年から大正 4 年までの間に前方部を欠損したことになる。

今回の調査で確認した前方部の存在を示す遺構は、5 トレンチで検出した南北方向の段差がある。段差の上、下には耕作土が見られ、水田の段差のようにも思えるが、段差の方向が周辺の地割の方向と異なること、水田に段差を設けるほど傾斜地でないこと、埴輪を含まない耕作土はこの地を開墾せずに現地形に客土して耕地化したことから、耕地化する以前より存在したと考えられ、前方部前面の地山の削りだしの可能性がある。さらに墳形を考える上で大きな要素として濠がある。明治年間の地籍図には濠が描かれているが、今回の調査においては明確な濠は確認できなかった。しかし濠が存在した可能性を考えると、一つは 1 トレンチの⑪～⑭層、2 トレンチの⑯層、9 トレンチの⑰層で、いずれも暗灰色系の粘土あるいは粘性の強い土層である。地山直上に堆積し、特に 1 トレンチでは地山上面に「足跡」「踏み込み」が見られ、湿地の様相を示す。濠の底の堆積土の可能性はある。いま一つは、墳丘内の地山の高さである。1・3 トレンチでは T.P.+19.7 m、7・8 トレンチでは T.P.+19.5 m である。もし古墳築造以前の周辺の地形が、T.P.+19.5～19.7 m の平地であったなら、1・3・7・8 トレンチで確認した墳丘裾の高さは、T.P.+18.7～19 m であるから墳丘の周囲を 0.7～0.8 m 挖り下げたことになり、この部分が濠ということになる。以上より、錢塚古墳の規模を復元すると全長 74 m、後円部径 54 m の前方部の比較的短い前方後円墳となる。このタイプの古墳としては、すぐ北西方向に位置する旗塚古墳（56 m）と大山古墳の北西に位置する丸保山古墳（87 m）の中間的な大きさになる。

最後に出土した埴輪についてであるが、埴輪列を除いて、大半がグランドの造成盛土、搅乱土坑の埋土から出土したものである。焼成の度合、タガの形状、内面の調整は、バラエティーに富むが、全て無黒斑で底部径、口縁部径はさほどかわらない。ただ、これらの埴輪が錢塚古墳に立てられていたかどうかは疑問が残る。仮製図を見ると錢塚古墳の周辺に三基の小古墳と東上野芝 1 号墳がある。東上野芝 1 号墳以外の三基については全くその存在がわからない。錢塚古墳の墳丘の形状は、大正年間にはすでに現況に近い状態であったわけであるから、グランド盛土に使われた大量の埴輪を含む土砂は先の小古墳の墳丘の可能性も考えられる。出土した埴輪には時期差は認められないが、埴輪列以外の埴輪が錢塚古墳に帰属するかどうかは慎重でありたい。

## 報告書抄録

ふりがな	ぜにつかこふん						
書名	錢塚古墳 大阪府立埋支援学校福祉整備事業に伴う発掘調査－						
副書名							
巻次							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	2008-5						
編著者名	橋本 高明						
編集機関	大阪府教育委員会						
所在地	〒 540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 Tel 06(6941)0351						
発行年月日	2009年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> ) 調査原因
ぜにつかこふん 錢塚古墳	大阪府堺 市堺東 上野芝町 1ちょう 1丁	27141	74	34° 33' 20"	135° 29' 0"	2007年8月	762m <sup>2</sup> 大阪府立 埋支援学 校福祉整 備事業
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
錢塚古墳	古墳	古墳時代	円筒埴輪 列	円筒埴輪 朝顔形埴 輪 形象埴輪	後円部一段目テラス部分より円筒埴輪列を確認		
要約	現存する後円部と前方部を想定した部分に10箇所のトレンチを設定して、調査を実施した。前方部前面部分に地山の段差を検出し、前方後円墳であること、古墳の全長が72mであることを確認した。						

大阪府埋蔵文化財調査報告 2008-5
錢塚古墳
－大阪府立埋支援学校福祉整備事業に伴う発掘調査－
発 行 大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前2丁目
Tel 06(6941)0351
発行日 平成21年3月31日
印 刷 株式会社近畿印刷センター

# 写真図版



遺物番号は左から2. 1. 3

写真図版1 トレンチ全景



1トレンチ下東から



1トレンチ上東から



2トレンチ北から



2トレンチ南から



3トレンチ上南西から



3トレンチ下南から

写真図版2 トレンチ全景



4トレンチ南から



4トレンチ北から



5トレンチ南西から



5トレンチ西から



6トレンチ西から



6トレンチ東から

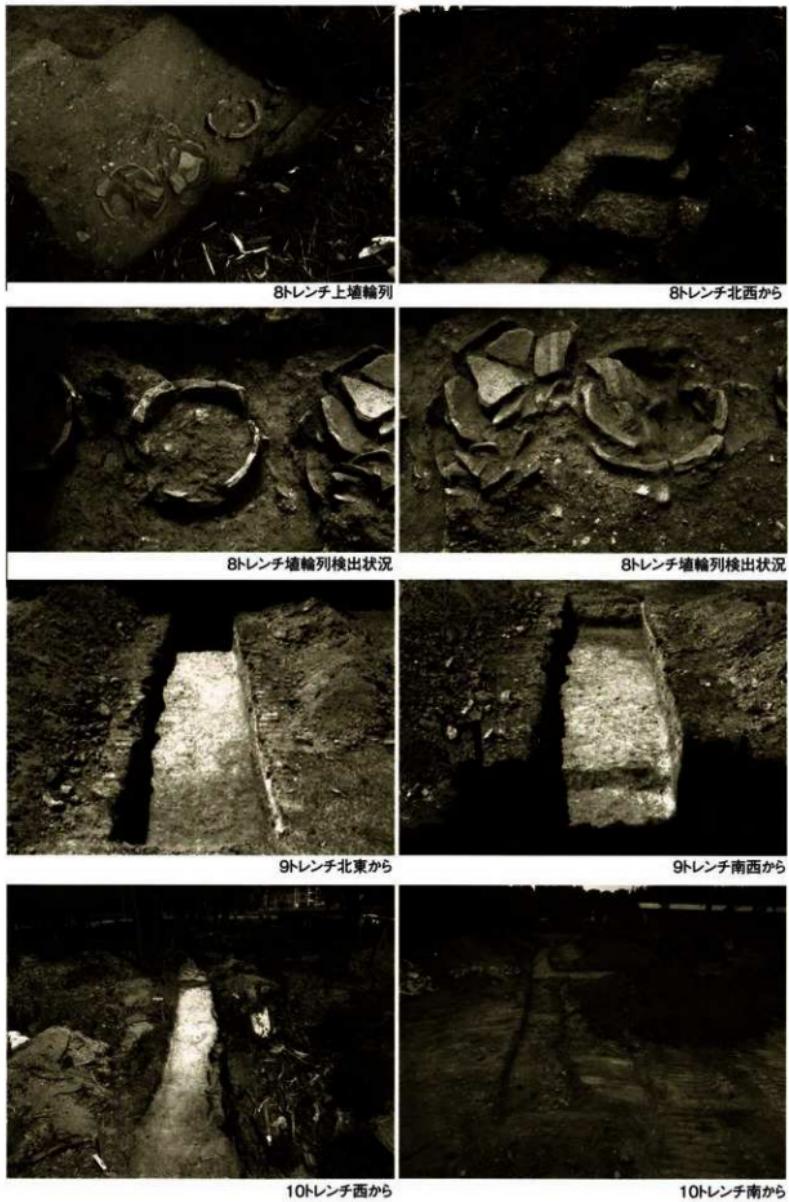


7トレンチ南から



7トレンチ北から

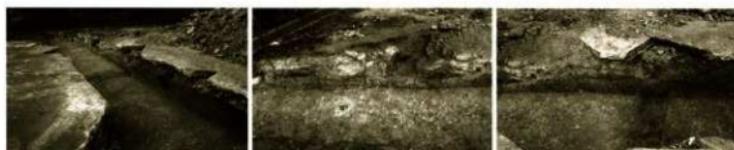
写真図版3 トレンチ全景



写真図版4 トレンチ断面



1トレンチ断面



2トレンチ断面



3トレンチ断面



4トレンチ断面

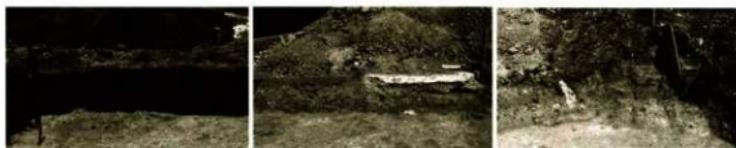


5トレンチ断面

写真図版5 トレンチ断面



6トレンチ断面



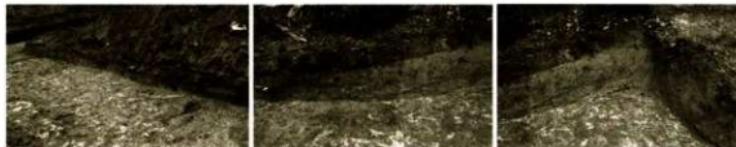
7トレンチ断面



8トレンチ断面



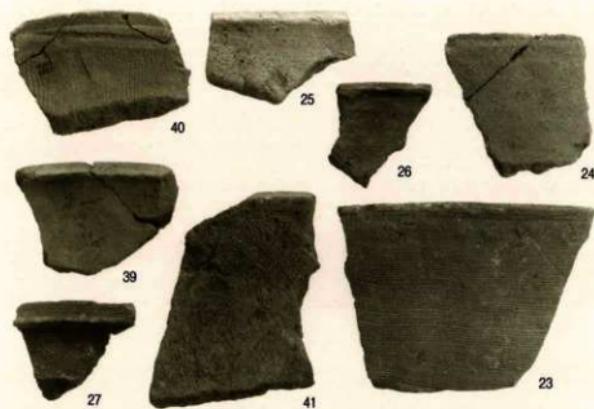
9トレンチ断面



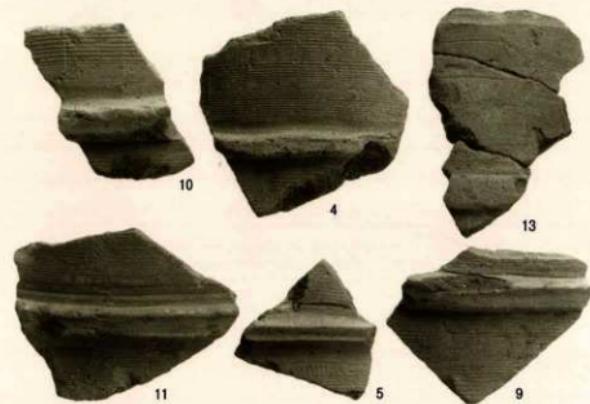
10トレンチ断面

写真図版 6 出土遺物 1

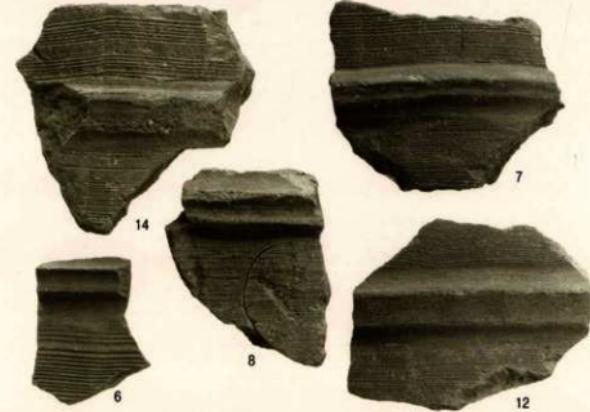
円筒埴輪・朝顔形  
埴輪口縁部



円筒埴輪輪部

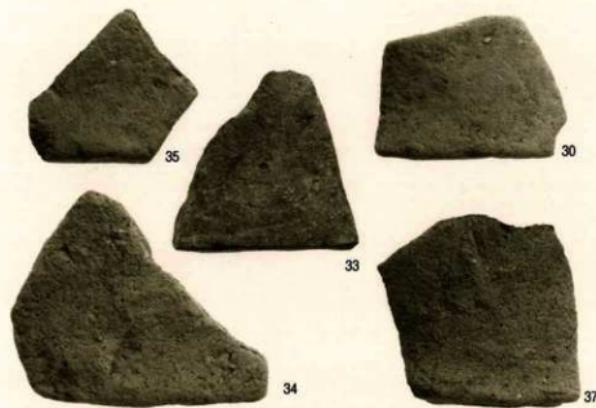


円筒埴輪輪部

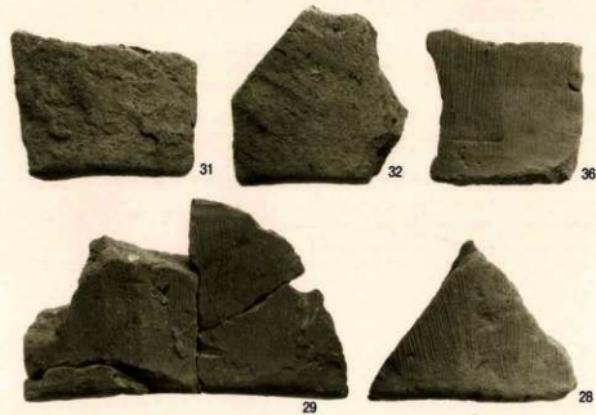


写真図版 8 出土遺物 3

円筒埴輪・朝顔形  
埴輪底部



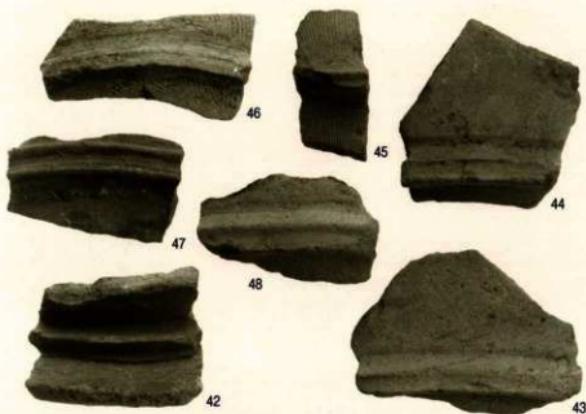
円筒埴輪・朝顔形  
埴輪底部



円筒埴輪・朝顔形  
埴輪底部



朝顔形埴輪



形象埴輪



形象埴輪

